

2008年度受託研究概要報告

自動車を取り巻く通信技術の応用 ～より楽しく～

研究メンバー

見明暢 デザイン学部プロダクトデザイン学科助教
曾和具之 デザイン学部プロダクトデザイン学科准教授

委託者

株式会社東海理化

1 はじめに

本レポートは、株式会社東海理化様が2006年度から毎年度開催している産学協同プロジェクトの2008年度版として本学で実施した活動からの知見である。

今回のプロジェクトは本学も合わせた全国の四つのデザイン系大学と合同のプロジェクトとなった。

同社は自動車の機能部品やアクセサリパーツを中心とした製品の企画製造を行っているメーカーであるが、その業務内容を踏まえて、本年度のプロジェクトのテーマは『自動車を取り巻く通信技術の応用～より楽しく～』と設定された。本学からの参加者は17名（IDコース三回生14名、生活ユニバーサルデザインコース三回生3名）で、制作担当と記録担当に分かれて作業を進めた。

2 活動内容

デザイン部主査の大見恭三氏は本プロジェクトの意義について、『知名度向上 / 社会貢献 / 教育貢献 / 企業内組織活性化』の項目を挙げている。

これらの意義を実現させる取り組みとして、東海

理化様本社プレゼンテーションによる社内への情報発信、六本木AXISギャラリー展示による社外情報発信、展示会における基調講演、雑誌掲載、プロジェクト結果をまとめた冊子の作成などが行われた。特に雑誌に関しては、AXIS（4月号P114-117）CarStyling(No.189)などに掲載され、学生の考える、『通信技術と自動車との関わり』を広く世の中に展開した。

本学独自の取り組みとして、制作担当学生による提案モデル作成と並行し、記録担当学生と本学曾和による『リアルタイムドキュメンテーション』を実施した。具体的内容としては、学生が思考している過程をリアルタイムで記録し、リフレクション（ヴィジュアルによる客観視の資料作成…作業記録映像、発言から抽出されたキーワード、ワークショップ記録、ほぼ全てのアイデアスケッチをまとめた冊子）を行い、学生が作品を作り上げる過程のサポートを行った。リフレクションによって、客観的な第三者の視点を追体験でき、自己のアイデアを客観視することが可能になった。また、リフレクションによる制作物も一つの作品として展示することで、作品展示だけでは表現できない、途中過程でこぼれ落ちたアイデアや思考の軌跡まで踏み込んで公開することができた。これは、産学協同プロジェクトの大きな意義である『学生の感性をできるだけ数多く見てみたい』という、相手企業や展示会来場者のニーズを満たす有益な手段となった。



写真3 AXISギャラリー基調講演



写真4 記録担当者制作物の一部

3 まとめ

学生にとって社会に自己のデザインを世に問う機会は数少ない。今回のプロジェクトは学生にとって、自己のデザインを多くの視点から評価してもらう機会となった。また、他大学の学生と同テーマで作品を創作することで自己のデザインを再確認する場となった。教員にとっては、本学における独自性の確認、課題の確認の機会となり、大見氏の語る『教育

貢献』の意義を実感するプロジェクトとなった。産官学連携プロジェクトなどに注目が集まる今日、文中述べたリアルタイムドキュメンテーションのような途中過程も含めて成果物としてまとめることは、多くの情報をまとめる技術において検討段階にはあるが、学生の感性を幅広い観点から世に展開する一つの手段として有効だと思われる。



写真1 作業風景



写真2 合同展示会



写真5 学生例1



写真6 学生例2